

を、平つたい皿にうすべつたく入れて、さわどうぞと狐が出して來たのですもの、鶴の長い嘴で

は、どうして夫が吸へるものですか。  
 鶴は大そう夫を残念に思つて、何でもこの敵討をしてやらうと思つて、夫から何日か経つて、狐を招びました。狐は、それとは知らずに何心なく行きました所が、今度は、口の細長い大きな瓶の中に、いろんな御馳走を入れて、「さあお上り」といつて出されました。狐は食べようにも口が這入らない。鶴は、夫では私が一人で食べますといつて細長い嘴を瓶の口にさし入れて、一人でみんな食べてしまひましたとぞ。

## 不思議な物語 (承前)

太田龍東譯

### 第四、話の話

ある國の王子に大層狩を好む方がありました。父王は其王子が狩に出るときは澤山な従者を附けて出すばかりでなく、保護の爲め大臣も従はさせ王子を見失ふことのないやうに注意させました。ある日王子は例の様に従者を連れて狩に行きますと、鹿が一疋飛んで出ました。王子はこの鹿を追ひながら深く山奥に分け入り、大臣なども后からついてくることと思ひ、鹿を追ふ獵師山を見ずと云ふ諺の如く、他も見ないですん、山の中に入りました、すると鹿は森の中に駆け入つて姿が見へないやうになつたので、残念に思つてその邊をしきりに探かしても一向知れません。仕方がない

から歸らふと思つて后を見ますと從者は一人もゐません、これは失策たと思つて馬を急がせて元來た道へ歸へりましたが、どうしたのか路に迷つて或は荆棗の中或は嶮岨と彷徨てゐますと、一人の美しい女が出て来て

『御身は只一人何所の里に御出でなされるか、若しや山路に迷つたのではありませんか。』

と尋ねますから、王子も

『私は山路に迷つたのですが、貴女も只一人この山中に何してゐなされるですか。』

と問ひますと、美女は

『卑妾は印度王の一女であります、今日馬に乗つてこの山中に遊びに参りました所、俄に眠くなつたので、傍に馬を置いて芝生の上に假睡して目を覺まして見ますと、馬は何所へやら行つて仕舞つ

て只妾一人殘こされて、木から落た猿のやうにここにゐるのでういます。』

と涙を流して最と哀れに語りますから、王子も可愛想に思つて、

『女の身で山中に迷つたら嘸御困りでせう、貴女の宿まで送りますから私の後鞍にお乗りなさい。』

と云ひますと、美女は喜んで後鞍に乗りました。

二人は馬に乗り美女の指す方に行きますと、凡そ五六里來たと思ふ所に一軒の家がありました。

この時美女は少々お待ち下さいと云つて馬から下りたので、王子は門口に待つてゐますと、美女は内の人と何か話をしてゐます。その話を聞くと

もなしに聞きますと次のやうな事を云つてゐます、

『皆よ欣べ、妾は汝等のために美しい肥太つた男

を連れて歸つた。近來珍らしいお土産を持つて歸りましたよ。』

と云ひますと、子供の聲らしいのが

『先刻から空腹になつてゐましたが、母上がよいお土産を下さると思つて待つてゐました。その男を早く連れて來て下さい。早く喰べたい。』と云つてゐます。

皆さんこの話を聞いてどうお思ひですか。先きの美女は全くの處恐ろしい人喰ひ鬼のやうな者であります。王子は之れを聞いて大に驚き、これは恐ろしやうと思つて馬に鞭をわて、一生懸命駈出すと、彼の美女は之を見て



『若し々々、何所へお行きなさいます。しばらくお待ち下さい。』と大聲を上げて呼掛けました。王子は返歸つて堪

るものか、と後をも見ずに一目散に馳せ去りまして、さて五六丁行きて後を願向きますと、やれ嬉しや鬼女は家に歸つたと見え影も見えませんが、はつと一息して四方を見渡しますと、元來た道で見覚えがありますから、心も落ち付き宮殿指して歸りました。歸つて父の國王に今

迄あつたことを詳しく語りますと、國王は王子の無事を喜び又大臣や家來の不注意を怒り、役人に命令して大臣を捕えて其罪をも聞かないで遂に殺

しました。

さて話は元に歸りまして、彼の大臣は王に向つて又云ふには

『我君よ、彼の醫師藤堂を今の内に殺し給はずば玉体は卵を累ねたよりもまた危険でふいます。今私の詞を用ゐなさらないと後で悔んでも仕方のないことになりませう。』

と恐ろしい劍の様な舌で以て立板に水を流すやうに説きますと、元から氣の弱い王のことですから、遂に大臣の巧言に説惑されて

『汝の云ふ所誠に一理あり。それでは彼の醫師の命を絶つことにせう、そうして如何にして殺せばよいか。』

と云ひますと、大臣は心の裡に仕濟したりと思つたが顔色には出さず

『それは何んでもないことでふいます。彼の醫師を招き寄せて、汝は大犯人であるから斬罪に處すと申されて、役人に捕縛せば宜しうふませう。』と申します。それではと云ふので一人の家來に命じて醫師を招かしました。

こんなことは神ならぬ藤堂は知る筈もなく、國王のお召しであるから身支度整へて宮殿に参りますと、王は藤堂に向ひ

『今日汝を呼出したのは如何な用事だと思ふか、よく考へて見よ。』

と云ひました。藤堂は少しも何のことやら解りませないので

『私は何御用事か知れませんが、只陛下のお召によつて参上いたしましたばかりでふいます。』と答へますと、王は

『用事とは他のことではない、汝の生命を絶つて朕が害悪を除かうと思ふのである。』

と云ひますから、藤堂は餘りのことに呆れて言葉も出ませんでしたが、稍々暫くして王に申すには『これは妙な仰せを承ります。私の生命を絶つて何の益がないます、又私に何の咎があります。』  
『云ふな藤堂、汝はこの宮殿に朕を殺す爲めに参つたのであらふ、この證據は十分あるぞ。』

と云へば藤堂は

『あゝ何んたることになつたのであらふ、昨日まで只管私は愛されてゐたに、今日となつて俄にこの殘酷な言葉に逢ふとは露ほども存じませんでした。これは何者かの悪口をお信じなされたので申しませふ、私がそんな恐ろしい心を以つてゐますなら、初から難病をお救けはいたしませぬ。』

陛下よ、よくお心を静めて御かんがへなをし下さ  
501

と申しますと、王は

『悪人は言葉を巧みにするものであるが、汝も亦その通りだわい、今更如何に申しても甲斐ないこと。誰か藤堂を打て。』

と命じますと、役人は命に應じて藤堂を笞杖で撃据えました、打たれた醫師の皮は破れ肉は露はれて、河と流れる鮮血は衣服を浸し、見るも哀れな有様であります、醫師は尙ほも苦しき聲振り立て、

『陛下よ、若し人間のお心あらば私の命をお救ひ下さい、上帝は陛下を恵み下されます。若し私を殺さば陛下は上帝の罰を受けます。』  
と申しますと、王は

「朕は決して汝を救くことは出来ない、若し汝を救けば朕が生命は救からないのである。」

このときは役人は藤堂の左右の目を布で蔽ひ、細で手を縛つて斷頸臺に上せ、氷のやうな白刃を振り上げて、陛下の聲と共に一撃の下に首を切りおとさうと致しました。藤堂は忽ち聲を發して

「私が今死ぬるに當つて一言申し残したいことがあります。陛下お聞き下さい。」

と申しました。王は役人に振上げた白刃を下させて

『今になつて申し残すことは何んであるか、早く言へ。』

藤堂は聲靜かに次のやうなことを云ひました。

考へもの

(一) 一寸よりか小さな人間で日本中を

あるきまわるものは、なに?

ろくぶ

(二) まいにち讀むもので、上からよん

でも下からよんでも同じものはなに?

しんぶんし

(三) 人間のからだのうちで、上にも下

にも、ほの字のつく五字からでき

た名の所は、どこ?

ほんのくほ